

誌 雜 樂 娛

萬 國

昭和二十一年五月十五日印刷
昭和二十一年六月一日發行

娛樂雜誌萬國

第一卷 第一號



號 刊 創

John

のぞみの母

尾崎喜八

國やぶれ山河あらはれ、
きびしさと荒れにしさまと
胸をうつながめの中に、
ふたつなき誠ひたぶる、
あはれみと愛のいのちに
いそしめるをみなら尊と。
ひらかれし新たな道は
奇しくしてたよりなけれど、
この道や國をすくはん
ひとすぢの大道ならめ、
かく思ひかく信じつつ、
つとめぬるをみなのちから
その力をのこを引きて、
その誠をのこを立たす。
もの産むはまことをみなの上も
なきちからなりけれ。
神祕なる性と智慧とに、
産めよかし國ののぞみを。



萬國

創刊號

グのぞみの母(詩)……尾崎喜八
 ラ明けゆく政治……新人山中一夢子
 ビ洗はれゆく街々……小さき者の夢二
 ヤ萬國撮影部……大竹省二

嵯峨の文反古

吉井 勇

蜻蛉のゆくへ

舟橋 聖一

春 浅し

秋山六郎兵衛
 (川村秀治)

壁に浮ぶ顔

E・V・ルウカス
 岡本成蹊譯

焦點の定義

徳川夢聲
 (近藤日出造)

女 形

岡田八千代
 (入山素之)

媚 藥 連載

邦 枝 完
 岩田專太郎画

人 氣

長崎謙二郎
 (清水三重三)

おかのと文吉

宇野信夫
 (木村莊八)

藝能座談會

司會 長谷川幸延

人氣花形 花柳章太郎・長谷川一夫
 高峰三枝子・市川段四郎

解放された演劇……備山正雄

目 耳 手 帳……安藤鶴夫

或る日の逍遙……坪内士行

洲 崎 八 景……喜多村緑郎

マ ー ト 座……瀧澤秀雄

居 眠……安藤常次郎

青春讀本處女の教養

式場隆三郎

吉田榮三追憶……大江良太郎

時事小唄漫談……石田一松

浅草の俳優たち……旗一兵

インフレをどう乗り切るか……針生健次郎

天然痘と發疹チブス……吉田機司

く す り……伊澤凡人

家庭 庭 農 園……福岡榮一

◇母牛・仔牛(短歌)……渡邊順三

◇夏 姿(俳句)……太田のぶ

◇政治とお臺所の直結(漫畫)……杉浦幸雄

☆表紙 海外トピックス……大衆小説叢書……齊藤正夫

吉田榮三追憶

—文樂座稽古見學ノート—



大江良太郎

どうせ一、二度は、難路の車中で警報に逢ふ事だらうと、覺悟を決めての旅だったが、その日は安泰、早朝一番だちの下り列車が、少しの遅延で京都驛に着いた。燈火管制といつてもまだ緩慢で四條橋畔あたり、凍る夜の人通りを河原町行き電車の窓から眺めて、滞在二ヶ月にわたる花柳章太郎を京都ホテルに訪ふたのである。

下加茂での映画撮影、引き續き南座初春興行への新生新派出演、「扇」「婦系圖」の道具調べに間にあふべく、私は東京を出發したのである。戦況の緊迫につれ、演劇への統制強化も急速に加はり出した頃とて、語りあひたい話題も山積してゐた。が、用談討議を後刻にゆづつて二人を握手させた提言が、彼から漏れたのである。これも憂愁低迷の雲を拂ひ退けた、逃避とは言ひきれぬ氣持の吹っ切りを、双方共に求めてゐたからであつたらう。

「道具調べが明後大晦日と決つたんで、榮三の親父さんから誘ひがあり、明日文樂座の舞臺稽古を見に行きたいと思つてゐたところだ。どうだね。一緒につきあはないかね。」

「それは有難い。是非行きたい。」
こつちの稽古に一日のプランクが出来た以上、勿論私は、賛意を飛躍させての同行を頼んだ。吉田榮三と花柳章太郎の交誼につらなり、文樂愛好の一人として、私淑敬慕の藝の人から親しく人形藝談を聞き得たのは、「淡路人形」上演の時だつたと思ふ。その後、大阪公演の際など、旅宿を同じにしてゐた關係上、芝居のあく前、ハネてから、兎角旅のつれづれを、演劇談義で繋いでゐたわけだつたが、茶飲みばなしの都度花柳章太郎は、黒く細長い茶筒様の籠から、おかちを出して振る舞ふのが常だつた。その説明によれば、榮三老妻女の手焼きおかちで、彼の

好物と知つて以來、下阪の度毎送り届けてくれるものだといふのである。ほんのり焼けて芳ばしく、栗油のききめも程よくて、風雅な美味を持つてゐた。その到來物の賞味から私は、饅谷の簡素な住居で、伴のやうな遠來の知己に、無慾恬淡、藝道一筋の文樂人形遣ひの至寶が、老夫婦さし向ひて炭火をかこみお餅をやく、孤獨の中に自適のする閑雅な生活風趣を感じずにはゐられなかつた。

確か新橋演舞場の文樂座引越公演に「加賀見山」の通しが出た時だつたと思ふ。新生新派同人で「長局」を總見し、そのあとで柳橋花柳邸に集り、榮三、織太夫を正座に東上歡迎の親睦會宴を催したことがある。古觀、榮三と結ぶ「長局」は、「道明寺」「二月堂」と共に兩名人の至藝中、誰しも最高峰として認めるところ、その夜も舞臺鑑賞の陶酔が、まだ醒めぬうちに酒杯を揚げたこととて、迎へる方の感激も残り、まわりかたも早かつた。正客とて年齢の疎隔こそあれ、杯を傾しむことに於て類を同じくする二人である。熱と興の感染が、一座を急速度に上機嫌へと導いた。純情義憤の伊志井寛は、「大序會當時の津駒太夫にかへり、曾ての同僚織太夫を相手に、文樂の將來を論じあひ、一層の自覺騰起をうながしてやまなかつた。そして談、高潮に達すると、榮三の席まで幾度となく膝を進

め、師匠たのみます、の後進教導を繰返し懇願する織太夫であつた。かうした空氣に幾分釣られた點もあつたらう。だが、枯淡の中に厳しさのある第一人者の風貌を何處までも毀さず、といつてもその夜柳橋泊りと決め、心置きなく好みの猪口を重ねて、垣根を越さず花柳を相手に後繼者指導の難を語る榮三の口もとには、うち解けた氣こころの嬉しさうな綻びがあつた。藝道修業の難さ、怖さのうち、如何に斯界が峻厳であるかは「文樂物語」を通して、夙に私達の知つてゐるところである。苦行を経て坐りの域に達した藝の人の言々句々は、總て貴重な教材となる。小腔で語る大阪言葉は、ことさらに圓滑性を持つのが常だが、内容に嚴正な眞理があると、ピリリと強く響く個處の出るものいもない。親子對談とでも言ひたい榮三、花柳の美しい交流から、私は、藝道論語を聴き漏らすまいと努めた記憶が新らしく想ひ出される。

昭和十九年十二月三十日、花柳夫人手製の辨當を袍に入れ、防空頭巾に巻ゲートルといふいで立ちで私達が京都ホテルをでたのは、八時を少し廻つた頃だつたらうか。空つ風が冷たく、朝霜も残つてゐた。半月前に「佐太村」を観に行つて空襲警報に遭遇した體験者の花柳章太郎は、殊更いかめしい装束をしてゐた。どの乗り物

も歳の暮の人込みで四つ橋の文樂座に辿り着くまでに二時間餘かかつた。玄關を入ると正面の卓子に新春を迎へる輪飾りが乗つてゐる。舞臺では「先代萩」の「竹の間」が進行してゐた。床は源太夫、人形は政岡の紋十郎、八沙の光造であつた。勧誘者の花柳が榮三の樂屋まで來意を傳へに行つてゐる間、客席の片端に座を占めた私は、外の寒空など失念し、「忘れ給はぬ御怒り」あたりで、熱く胸に迫つて來るものを押し堪へたりしてゐた。それよりも目を見張つたことは、黒衣を着、顔を隠してゐる公演中の舞臺と違ひ、稽古の事として、人形遣ひの各自が、みな素顔を晒して出でゐる。政岡の左を遣つてゐるのが龜松であり、御殿醫小牧の左遣ひを玉助がつとめて登場したのには、ひとかたならず驚いた。戦局苛烈で赤紙、白紙が舞臺裏にもまひこみ、人員不足を告げてゐることは事實であらう。それにしても玉助、龜松となれば、立派に藝格を持つ人である。それが左遣ひの勤めをしてゐるのだ。修業場文樂のしみじみした實感が、稽古見參のわが身に迫つてくる。と、筒袖仕事着の吉田榮三が、花柳章太郎と共に客席へ這入つて來た。招かれるまま私も椅子を前に移した。會釋をして聊か氣のさすものもあつたが、勉強のノートを取り出した。其處へ冴えた木頭が入つて、「竹の間」の道具かはりと

なつた。人形独自の政略、八汐、沖の井、後向きの立ち身のまき極つた姿が、美しく目に残つてゐる。

次の御殿「飯たき」を呂太夫と重太夫で語つた。紋十郎も「何が不足でおなきやるぞ」の大泣きまで、政略を縮めて遣つてゐた爲、小細工が省略され、役に心理的な巾の出て来たのが嬉しく感じられた。「後には一人」のさわりになつて、千松の死骸の位置が問題となつた。古老榮三が明確にこれを教へ捌くのである。ふと振りかへると、紋下古親太夫も最後方の座席から舞臺へ注視を送つてゐる。稽古に審判の目が光るのも文藝らしい。

忠臣蔵の「七段目」は、由良之助の大隅太夫、お輕の伊達太夫、平右衛門の相生太夫その他總勢の掛合ひである。勿論、一力の屏外から初まるが、なんでもない場面ながら、「聞かば伊勢の初たより」で三人侍の引込むところなど情緒的である。道具が茶屋場にかはる「バケ」現して「こん波まふが信田の狐」まで進み、由良之助と九太夫のイキが合はむ、早間過ぎるといふので監視の客席から駄目が出た。幾回となく小返しが繰り返へされる。「天津乙女のお輕女郎」のくだりで、平右衛門の助の靈に赤い玉の簪を見いだしたのも、文藝の稽古見學に於ける私の收穫であつた。段切れ、「加茂川で水難

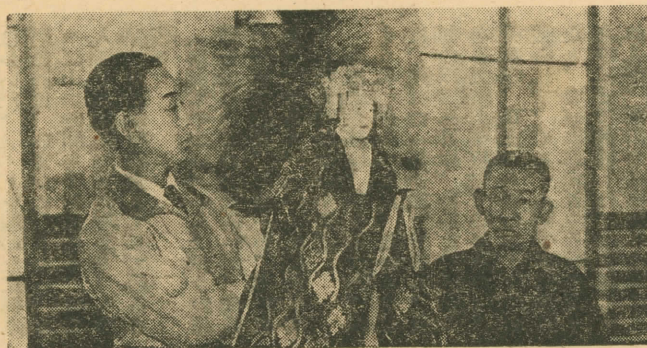
炊」に至り、平右衛門が九太夫の死體を擔ぎあげて柩が入る。人形にして可能な面白さと言へるであらう。

新作「出陣」には間に合はなかつたものの、「先代萩」「七段目」と通して見て、書の部演目の終りとなつた。外には冷たく夕闇さへ迫つてゐる。急に空腹を覺えた。案内されるまま交樂心醉の二人は、榮三の部屋で辨當を使はせてもらふこととなつた。光造と榮三郎が、「壽式三番叟」の人形手入れにいそがしい。いづこも同じ燃料飢饉らしく、壽命の短かい急造燃え残りの炭火を、樂屋番が十能に入れて持つて来てくれる。これを受けとつた榮三老は、私達を敬待すべく火吹き竹で、いそいそと火種を作るのであつた。そして正月の餅を丁寧に焼いて、京都からの閑人者に振舞ふのである。その屈託のない素朴な親し味が、如何にもしみじみとしてゐて、私の心までも温めてくれた。

「壽式三番叟」の舞臺が出来たのだらう。二丁が入つた。熱と氣と品で使ふ三番叟氣味合の交錯を、師匠から要點指導されてゐた光造と榮三郎が、軽く會話して部屋暖簾を出て行つた。それをキツカケに私達も再び客席へかへつた。初春の演目らしく、掛合ひの撥の音が派手に明るく小屋一杯にひろがる。鈴の音、足拍子、二人舞の型を破つて調和をとらねばならぬこ

の人形は、成程壯者の氣力を要するものと言はなければなるまい。やがて待望の「寺子屋」となつた。即ち十一月に「道明寺」を選び、續いて暮に「佐太村」が出、そして正月劈頭「寺子屋」を揃へて、「菅原傳授手習鑑」を全通ししようといふのである。先づ「樂地の段」を離太夫、「寺入り」を宮太夫が語り、慈々紋下の出場となる。人形は榮三の松王、文五郎の千代、龜松の源藏、榮三郎が抜擢されて戸浪を使ふ。借此處で、人形淨瑠璃の古式に則る舞臺稽古の手打が行はれるのである。細述すれば、柵色に交樂座と白で染め抜いた半纏着用の「とやぶれ」三人が、古風な饅頭笠をかぶり、太い青竹の中程につるした小太鼓を最氣よく叩きながら場内に入つて来る。と、お斬子部屋からそれに合せて大太鼓が鳴る。言はば初日をひかえての町ぶれ延長ともいへるであらう。この「とやぶれ」を合圖に、紋下古親を中心とし、太夫、三味線、人形造ひ一同が舞臺の左右へ並び、「打ちまじしよ、チョン／＼、祝ふて三度、チョン／＼」の、御靈交樂座につながる獨自の手打式が行はれるのである。

それから古親太夫が床の人となり、「源藏戻り」にかかるわけだ。交樂の「寺子屋」鑑賞は、三宅周太郎氏の「交樂の研究」にくわしいが、「せまじきものは宮仕へ」で源藏が羽織の紋を見、それから天照皇太神宮の軸を拜む。その後で足袋をぬぐのだが、緊張の汗を覺えてわが家に歸り、足袋をとりたくなる氣持の解釋など、一寸面白く、「岩松はるぬかと呼ぶ聲に」



(在りし日の榮三) (右)

子供を呼び出すくだりは、節と撥音の快調が如何にも湧えて、床に絶対信頼の置ける交樂に於てこそ、初て陶然と酔へる個所である。「奥にはばつたり首打つ音」あたりまで進むと、寸分弛まぬ古親の

意氣もさることながら、榮三の松王が渾然と解けこんで生彩を添へて来る。一體紫縮緬の鉢巻に白の力紙を持つ松王の頭は、同じ文七のうちでも一番美しく賞味されるものだが、使ひ手が名人となると、血液が通ひ、人形の表情まで躍動するやうに思はれて来るから、藝の迫力は全く神秘である。「是非に及ばず菅秀才の首打ち奉る」の直後、松王が首桶を氣にして手を出しかけると、源藏がこれを遮る。玄蕃がすかさず監視の身構えに移ること説くまでもない。此處でツケを入れ、三者大きく極る時、榮三は「アツ」と聲をかけるが、待合せの意氣がビツタリ合致して、堪らなく嬉しい繪畫美を現出する。かうした緊迫感の重積も、「あのニツコリと笑ふて」まで来ると父性愛松王にかへつた人間味のゆとりが漂ふ。斯く碎けた瞬間、人形を使ふ榮三の面にも、上下脱いで本音を吐く心の救ひのやうなものがうかがはれて、迷ひなく親める佛像に類似的表情が浮かぶ。これも徹した藝の虚無がさせるわざであらう。「いろは送り」になつてからの交樂に於ける妙味に就いては、今更贅言を要しまい。即ち芝居だと割愛詞で簡単にかたづけけるのだが、人形では派手に、千代の哀切を極めた振りごとで感激を現す。ことに「明日の夜誰か」のくだりになると、松王が二重から下手へ下りて源藏と位置交代りにな

る。「添え乳せん」で千代が經帷市を持つてきまる。それから「跡は」の長い節尻に従ひ、駕籠の脇を離れた松王と、千代の二人が、節と三味線のリズムに乗り、足拍子をかまませつつ愛情切實の劇詩の中へ解けこんで行く。そして段切れに妻が六字の旗を持ち夫を見上げるのだが古観、榮三、文五郎の三トリオが高潮の中で一體となり、藝術の三昧境を醸成するのである。

幕になるとすぐ、傍らの花柳章太郎は興奮の面を向けてかう言つ

夏 姿

太田のぶ江

葱坊主小さくそだち風を聞く
若葉美しわが来し方を子も来る
夏姿をみなは魚のごとく過ぐ
齒科醫師のあるとき金魚きづかひぬ
兜蟲百合のらつばを吹いて見よ
灯ればあはさきえにしの青林檎
露の葉に包める螢もらひけり

た。幾度か観た文樂の稽古のうちで、今日ほど緊張した舞臺に達したのは初めてだよ。」と。私もこれに應へた。機會あるごと人形芝居の公演を鑑賞して來たが、こんなに火花の散るやうな寺子屋を觀た記憶がない。その日の稽古見學によつて私は、「寺子屋 解題」に新発見を得たやうな氣持になつた。それは、「菅原傳授手習鑑」四段目といへば、竹田出雲の持場で、松王千代と小太郎の親子別れを書いた、と言ひ傳へられてゐるが、反面に於て純眞な夫婦愛を強調し

てゐる作であるのに氣がついたのである。「いろは送り」で込みあげて來る清い涙は、小太郎の死を悼むといふより、残つた親の理解と愛情……いへば、わが子を犠牲に先だてて、すまなかつた、許してくれ、有難たうよ、の夫と妻が、心を寄せあつて互ひに無慈悲をかこち歎く、深い勞りの姿の中に、熱くもせまる一滴であつたのだ。さういへば前の方の「御夫婦の手前もあるわい」の個處、即ち千代が小太郎の身替りを知つて慙歎にくれたあと、人形では松王が妻の胸のあたりを扇で一すつく。千代は軽くすねた型で足拍子よろしく上手へ廻り、少しツンとして正面向きに坐るが、此處なども趣味にならず、人形なればこそ出る夫婦愛發露の伏せ勢とも見られるであらう。或ひは手前味噌の解釋と言はれるかも知れない。だが私は、文樂座の「寺子屋」を、かく觀、かく感じ採つたと重ねて言ひ添へて置きたく思ふ。

夜の部の最後は南部太夫の「十種香」、七五三太夫の「狐火」で「廿四孝」文五郎が喜の字の祝ひに入重垣姫を遣ふといふのである。奥庭になつてからは、紋十郎が左、龜松が足を遣つて師匠の長壽を祝福する……。興が乗るまま時間を超越して勉強したわけだつたが、時計を見ると十時を過つてゐた。慌てた二人は榮三老に別れを告げ、大急ぎで外へ出た。震へる寒

さも手傳つて地下鐵まで小走り、阪急の階段もかけ上つて、漸く京都行きの終電に間にあつた。

四條大宮に着いたら十二時、既に市電はない。歳の瀬の月は高く牙えて二つの影法師を冷たく路上に投げる。靴音を凍らせつつ私達は歩いた。ノートを埋めた文樂見學餘談は、いまだに盡きない。思へば十二時間も客席に坐り、深夜人通りの絶えた京の街まで、人形追慕の亡者を背負ふて來てゐるのだ。

「自負ぢやない。一人よがりの想像を走らせるのではないが、今日の榮三親父は、此處一番、本物を見せやう、といふ氣になつてくれたのではないかな。」

花柳章太郎は、かう言つた。私もうなづきかへした。といふことは、先刻の「寺子屋」である。最初の取組み方は、あままで真剣になる氣構えを持つてゐなかつた。それが、松王の人形の本イキに引張られて、ぐんぐん調子が本格になり、ついには鬼氣迫る夏の渡りあひにまで進展した。なればこそ二人が、京山の寢姿を目の前に見る旅宿の軒まで、醒めずに文樂を語つて來たのである。幸福だつた。愉しかつた。警報の憂愁を忘れて、一日古典の陶酔境にひたり得た日だつた。

昭和二十年の正月興行以後、空襲頻繁につれ、多分文樂座も完全にはあけ得なかつたのではないか

と思ふ。間もなく大阪誇りの傳統舞臺も、災火のために焼失してしまつた。そして休戦協定成るに及び、十月に京都南座で文樂の人形芝居が開場した。吉田榮三は、櫓下古観太夫の「堀川」で興次郎を遣つてゐる。それが最後になつた。昭和二年以來、文樂座人形遣ひの座頭となつて約二十年、寡黙實踐、斯道復興に盡した藝の人榮三は、享年七十四才の長壽を全ふし、十二月八日に妻女のとを追ひ、鬚髮鬚の靈が靜かに天へ還つたのである。

十二才で至難と苦行の藝道に入つて、門閥とてない初代吉田榮三で押し通し、由良之助、松王、菅相水、熊谷、忠信、俊寛、光秀から重兵衛、興次郎、權太、勘平、治兵衛、團七、さては尾上、政岡、お關等々の女形まで、全く兼ねる演技を修得してゐた實力は、不撓不屈の藝魂に合せ、緊めてさぐる獨創の研究心あつて裏づけられたものであらう。

村夫子然としてあくまで謙讓、その癖親しめば樂屋の炭火でお餅を焼いてくれる好々爺の榮三老：幽明境を異にして追惜しきりなるを覺えるにつけ、あの稽古見學の一日を想ひ出さずにゐられない。同時に松王の「あのニツコリと笑ふて」を遣つた瞬間の慈顔が、鬚髯と目に浮んで來る。今夜は一年後の十二月三十日である。

(新井新主事)

といふ話によく似てゐて今度のといふ話と綜合計畫とは實に上

編輯 後記

世界萬國
の注視は、
新しい文化
國家として
の日本が如
何なる様ひ

を見せるであらうか、と云ふ一點に對して寄せられてゐる。窮極を測り知れない文化建設への優れた力と、燃へたやうな熱情が、今日ほど要望される時代はない。誤またれた過去の一切を綺麗に清算して、なほ絆々たる餘力を示すに足る立派な文化日本を再建してこそはじめて、われわれは世界人としての認識を世界萬國の人々によつて許されるであらう。

○ 雜誌「萬國」は文化娛樂面の一翼として、今、混沌たる雜誌界の現状の渦中に創刊の名乗をあげた今回の總選舉の如く少からず亂立の感を與へてゐる雜誌界に登場するからには、新しい存在の理由とその價值を十分に感ずればこそであるが、その主張等は雜誌を通して讀者諸氏の判讀にまつわけで、當落は一つに諸氏の無言の一票によつて決せられるのである。

雜誌の生産は、現在非常な苦難期にある。そしてその苦汁は業者全般に課せられたもので本誌のみが歎ずるところではないので、われわれはひたすらな熱意と努力で押切らうと決心してゐる。

大衆文藝に於ける新人の貧困さは怎うしたことなのであらうか。尤もこれは獨り大衆文藝に限つたことではないが、既成の大衆文藝そのものも、一應の行詰りに來てゐる。潑刺たる新人の奮起登場に俟つて清新の氣を注入して貰ふ以外にないと思つてゐる。「サンデー毎日」が今日迄、大衆文藝のため新人を求めて示したあの、一貫した熱意には敬服するものである。しかし時代は移つた。そしてその傳統的大衆文藝募集は既に刺激も生彩も失つてゐる。本誌はその意味で新人のための新しい舞臺とし創刊と同時に懸賞規定を發表した舊つて御應募を切望する。この審査の結果は、規定の通り最後の後選圈内の人々の中より希望者をすづつて大衆文藝のための研究會の如きものを作つて眞面目な仕事としてやつて行きたい。

○ この種の雜誌の生命は、その小説欄の内容が大半の價值を左右するやうに思はれてゐるが、本誌は小説偏重でなく、企業性に重點を置いて誌面全體を通じて十分な、愉しき、明るき、面白きの横溢せる雜誌としたいと思つてゐる。何分にも創刊號は準備不足で、その點甚だ不十分だが、號を追つてわれわれの努力の結實を認めていただけることゝ信ずる。(藤)

雜誌「萬國」創刊號は初夏六月

若點の如き清新さを以て誕生した編輯局一同、晝夜兼行約四ヶ月にわたる苦心の結實だが、さて出來てみると、いたるところ「あゝもしたかつた、こゝもしたかつた」と云ふ個所が多く残念乍ら滿點とは申されず甚だ汗顔の至りと云ふ外はない——がこれは號を追つて改善してゆけるし、生産工程の面も日と共に能率的になることゝ確信するので、いろ／＼なプランが次々に實現出來ると思ふ。讀者諸氏の絶大なる支持と御後援を期待する所以です。

○ この種の雜誌の先輩誌たる「日の出」「キング」「オール讀物」等の持つてゐた色彩とか特色とは別なものをねらつてゐたのだが、口でこそ別なものと言へるがさて實際にあつてみると正直なところ暗中模索と云ふ體たらく。今後逐次「萬國らしき」乃至「萬國ならでは」と云ふ特色を發揮せしめたいと思ふ。

われわれは今「萬國」の出發に際して、前記先輩誌のこれまでの功績は大に認めてゐるが、すでにその使命は一應ビリニードを打つたかと思ふ。今や新生日本の胎動を前にしてかうした一娛樂雜誌もこのへんで新陳代謝した方がいいではないかと考へる。それ故にこそ本誌のもつ使命の大なるを痛感せずには居られない。

本誌は何と言つても準備不足の點で、カバー出來ないところが多あると思ふが、諒解してほしい。これでも出る迄は随分苦心したつもりだ。出版とか編輯と云ふ仕事は單に「生活のための職業」では出來ることではない。仕事に熱をもつ以外に、この仕事に「めしよりすきだ」でなければ到底出來ることではない。——私は出版生活二十何年と云ふ經歷はあるが娛樂雜誌を編輯したことはこれがはじめてである。たゞ常に娛樂雜誌に對してはいつも關心をよせてゐたので日頃の所謂とつておきのプランの實現を計りたい。讀者諸氏も斬新な企畫があつたらどし／＼と編輯部宛申越されたい。そして「一方「内輪の人」としてのよき御忠告をも歓迎する。かうして發行所と讀者の直結をのぞみたい。

○ 最後に特別お願いしたいことは「一人が一人を」と云ふ直接讀者の倍加運動をおこされんことです。言ひふるされた言葉だが「萬人必讀」「一家に一冊」主義で大に讀者を獲得して欲しい。

今やあけぼのの日本の、あらゆる階級の友として、あくまでも民主的に、あくまでも大衆的につねに働く人の好伴侶たる自信と矜持を以て本誌はすすんでゆく。お忙し中を特に本誌のために御執筆を快諾された諸先生へ心から御禮申し上げます。(橋本廣介)

愛讀者の皆様へ

○ 毎月確實に入手されるために本誌は直接購讀のお取扱ひをいたします。大體六ヶ月四十圓、一ヶ年七十五圓(送料共)振替又は小爲替にて御申込下さい。正確に毎月清算いたし第一番にお手許へ届くよう取りはからつてゐます。

○ 本誌へ廣告掲載御希望の方は直接本社宣傳部へ御來談又は御一報下さい。

○ 本誌掲載の記事は一切無断上演、上映、放送、轉載を禁じます。

昭和二十一年五月二十五日印刷
昭和二十一年六月一日發行

萬國 創刊號

定價六圓五十錢

編輯兼
發行者
高安雄 吾

印刷所
小坂 孟

發行所
株式會社
萬國新報社

配給元
日本出版配給株式會社